第127号会報 1989年11月20日

第6回総会ならびに講演会

第6回総会と講演会は10月11日・12日・13日、筑波大学理学部の会場で開催された。12日午後、須田英樹氏（筑波大学理学部）と大雲会員による特別講演、出席者の発言が行われ、講演の後、総会は西田議長の指揮で、安川大会委員長の挨拶に続き、続いて講演者へ発表文を有事務会長より授与された。

小口編集部員の寄稿報告（本会報告）の後、下記式次第に続いた：

（第6回総会式次第）

日時：1989年11月20日

ニ 開会の宣言
（2）総会議長指定
（3）大会委員長挨拶
（4）JG出版財政報告
（5）会長挨拶
（6）運営委員会報告

（7）編集委員会報告
（8）読者

（9）誌録

（10）閉会の辞

ニ 会長挨拶

今後、筑波大学理学部の会場で6年ぶりに神戸で学術を行い、会場の運営は非常に細かい心配をしていた。講演の時間を持ってプラウン管ディスプレイの上にカラーディスプレイなど、いかにもハイテクの時代の講演会という感じでした。また、ゼロックスコピーの無料サービス、スライド、OHPのテストができるように休憩室に余分のプロジェクトを準備していただくことができ、いつも学会の裏手の機密を守ってくださったのはありがたいことでした。さらに万能レポの夜景を楽しみながらの懇親会も印象に残りました。神戸大学の皆様に厚くお礼申し上げます。

さて、春の学術会が今回の学術会までの一番大きな出来事といえ、7月8日に英国のExeterでAOGAの学術総会が開かれたことが彼女たちの参加につながるようになりました。かくとも質問が多かったのはありえない会員の姿でした。これまで大学院生などの若い人たちの参加はほとんど来国に限られていたどんなが、わが国も来国に近づきつつあるので、喜ばしいことかぎりです。若い研究者の活躍や交流は大変評価され、わが国の研究の現状を再認識されるきっかけになったようです。
こんどはOAGA総会で談話をお持ちの次第で、IGRFをもとに地球磁場の情報を民間会社に提供して資金を獲得しようという英国地質調査所からの提案でした。それも小豆のような提案が提出されることになったのは、開発途上国での地球磁気測所の維持がきわめて困難になっているという事情による。閉鎖されたり、閉鎖寸前の観測所が数多くあり、地球磁気観測に対する深い不安を引き起こしています。提案自体は無理な談話を巻き起こし、結論を得るにはいたりませんでしたが、開発途上国の観測所をどのように維持していくか、はわたし今が急務に取り組まなければならない問題として残っています。

つぎにOAGA学術総会(1983)はアルゼンチンで開かれたことが決まりました。また今回の総会で、福島県会長が、長い間OAGAにたいして低くされた功績により、OAGA名誉会長に推挙されました。わたしたちも肩の重さが申し上げます。

米年わが国では二つの画期的学会が開かれようとしています。ひとつは4月に東京工業大学で開かれる地球物理関連学会の合同大会で、もうひとつは8月に金沢で開催されるWestern Pacific Geophysics Meeting（国際地球物理学金沢会議）であります。この金報の別冊で報告されているように、いずれも若者と青年が進んでいます。新しい時代を反映するこれらの学会をぜひ成功させたいものです。

この秋の学会からおめでたい行事がひらつまえました。J G G論文奨励賞で、昭和から学園会議で慎重に選考を進められた結果、川村光秀氏のGeomorphic secular variation during the Brunhes epoch inferred from the paleomagnetism and the last 200 years geomagnetic field,"に授賞されました。このごぞくぞくと優れた論文がJ G Gに発表されることを期待したいものです。

この学会の会員でよその学会の賞を受賞された方もいます。加藤進会員が、「中間大気研究の発展に尽くした功績」により、日本気象学会の藤原賞をお受けになりました。また上田誠也会員は「地球物理学の手法の応用を通じて地質学へ顕著な貢献をなしにした功績」により米国地質学会からGeorge P. Woolard賞を受賞されます。心からお祝い申し上げます。

最後に懇切なお知らせをせねばなりません。今度の名誉会員が5月1日逝去されました。ご承知のところ今度先生は本学会の創設に当たって大切に尽力くださいました。先生の志をついて学会の発展に努力して行きたいと考えます。先生のご冥福をお祈りします。

III 1989 J G G論文奨励賞審査報告

論文名  Geomorphic Secular Variation during the Brunhes Epoch Inferred from the Paleomagnetism and the Last 200 Years Geomagnetic Field

著者 綱川 秀夫

1. 背景

古地磁気永年変化（paleo-secular variation: PSV）の研究はカナダのアプイング、イギリスのクリフ、アメリカのコックスなどによって始まったもので、古地磁気のデータから、過去の磁場変動の統計的性質、non-dipole場の重荷に基づくdipole場のゆらぎの統計的な推定を、明らかにしようといるものである。時間的には10^5~10^8年の平均的変動を、双極子型の磁場からの、自然平均的な様の形で求める、この値が地理的精度においてどのように変わるかを調べることが多い。

2. 今年の現状

PSVの研究は1960年代から始まっているが、現在でも研究は活発に行われている。最近、注目されているモデルは、dynamo作用に基づく磁場パターンのdipole-familyとquadrapole-familyがあるものである。オーストラリアのマクファレンらのモデル、core表面まで戻ったg_1、g_2の二つの項で定義され、アメリカのコンスタープとパーカーのモデルなどがある。このような研究が盛んに行われている理由は、古地磁気の研究では、時間を追跡して地磁気変動を調べることが困難なこと、もしわからず、統計量として求めたPSVの精度に対する依存性は、古地磁気研究における最も基本的な問題の一つである、地磁気場の生成機構（dynamo理論）に大きな影響（制約）を与え考えられるからである。PSVについては、これまで日本の研究者からの寄稿は残念ながら余り多くはなかった。

4. その特徴

縄川論文には、まずプレスリース（現在から70年前まで）の古地磁気のデータを解析し、各地の資料からdipoleを仮定して求められる地磁気気の分布が、これらが一様に考察されていると同様、平均あるいは磁場に対する対称分布（フィットとフィット）でなく、これらが強大（外れ値）を示した場合を見た。この原因を探るために、最近予報のガス係数（g_1, g_2, h_1等）の変化について調べ、それが双極子成分（g_0）と相関の強いものでは、補正には無相関のものにかけることを発見した。

そこで、この相関を保ったまま過去の磁場変動がおこったものと仮定し、双極子の変動の計算的性質については古地磁気強度変化の研究から知られたものを用いて各地のPSVの予測値を推定値を求めるところ、実測とよく似た、赤道に対する対称性の悪い、推定値の分布を与えることが分かった。

更に、この論文では、いくつかのガス係数に対する相関の強い変異は、コア内のダイナモ作用に原因を求めるべきであるとは論じている。大きな変異を主に考察されるのが、この関係を、前述のマクファレンのモデルと比較してみると、両者全く一致しない点である。縄川のdipole-related familyはマクファレンの言うdipole familyに全く関係のないことが判る。

4. 評価

編集委員会はこの論文の「元気のよさ」、「いきいきのよさ」、あらゆる「面白さ」を高く評価した。わずか200年間の最近のPSVとお年寄りのPSVをそのまま結び付けることは、かなり強い手法とも考えられる。また、この論文の推定したPSVの推定値が実際であるかどうかについては、今後の研究に待たなければならない。

しかし、これまでお昨年の研究者ではない解釈法の仮定を疑ったかから、非対称性を指摘したのは高値評価されるべきである。更には、これまでの日本の研究者が新しいモデルを作ることに余り寄与していない点も含めて考えると、間違いの可能性を恐れず、大胆な仮説を打ち出して行く姿勢も新しい研究者として重要な要素であると考えられる。

以上の考えから、編集委員会は第1回J G G賞の候補として縄川論文を選んだ。
テーマ  「地球温暖化について」
気象関係は松尾大雄教授（東大）、
火山関係は Prof. H. Sigurdsson（Univ. Rhode Island）
(v) 合同懇親会 特別講演 総会の後、6時頃から開く。
参加費 ¥4,000（但し学生は ¥3,000）の予定。

(4) 予稿掲載関係
・共通セッション・シンポジウム用として一冊、各学会ごとに一冊それぞれ作る。
・共通セッションの原稿は各セッションのコーディネーターに直接送付する（※参照）。
・当学会(SGEPSS)の合同セッションについては、従来通りとする（※交付方法参照）。

(5) 原稿のフォーマット
・共通セッション・シンポジウムについては、以下の通り。
  B4版紙長は
  上下マージン20mmとする。
  左右マージン15mmとする。
  まず題目、著者・所属（英文）を横幅50mmの枠内に記入（ただし左端30mm余る。）
  次に題目、著者・所属（英文）を同じく横幅50mm枠内に記入（ただし左端30mm余る。）
  以下本文が続く、和文でも英文でもよいが、和文の場合は横
  2列とし、中央部分に10mmの空白枠を作ること。
  SGEPSS関係のセッションについては申込み用紙、予稿原稿
  用紙とも従来通りである（※交付方法参照）。

(6) 専門研究機関
1990年 2月 1日（木）（厳守）
(7) 分担金：延べ会場使用時間数に比例した分担金を各学会から徴収する。総会は分担金の対象に、各種委員会は対象外とする。
(8) その他
各種委員会等については、機切までに東工大実行委員会に連絡すること。
ブオーザセッションを設ける。

※各共通セッション・シンポジウム一覧
セッションまたはシンポジウム名・(関連学会)・主催学会人(予稿原稿送付先)／観光学会人／「世話人から投稿者への呼びかけ」
(ア) 気候・海洋の起源と進化（地球・地球化学、火山学、北海道）
松井美陽（〒113 東京都文京区松茂2-11-16 東京大学理学部地球科学教室）／川村瑞（東大理）
「アポロ300号全体の成果の上に、太陽系の起源と進化が実証的に研究され始めている。学会の合同大会でこれまでの成果を総合的に討議することは大変意義深い」
(イ) 地球内部構造（地球・地球科学、火山学、地質学）
川崎一郎（〒203 大阪市）／松本理（東大理）
「マントルとコアにおける対比の報告は地球破壊速度や地気伝達速度の様式、垂直方向の変化を明らかにし、また、物質科学との連携により、そのメカニズムに迫る」
(ウ) テクトニクス（地球・地球科学、火山学、地質学）
関野勝三（〒113 東京都文京区松茂1-1-1 東京大学地震研究所）／西原洋一郎（〒606 大阪府）／多田道（地理院）
「海洋地域テクトニクス（ODP・DLPの成果、深海・西太平洋・」

－3－
テクトニクス等、テクトニクス全域を含む
(エ) 地震変動
岡田義光『土35つば市天王台3-1国立防災センター第2研究部』
／竹本順一（京大物理）
「地震規模と浅地震活動に関連したローカルな地震変動まで、あらゆる時間スケールにおける地震変動の成因、観測結果ならびにその解釈に関するテーマを含む」
(オ) 重力
河口芳郎『3920金沢市丸の内1-1金沢大学理学部地学教室』
／平村幹夫（静岡大教授）
「重力の測定方法、重力異常、重力変化、ジオインド、地球内部など、重力予報の利用に関するあらゆる点を解説します」
(カ) 電磁場で見た地震・マントル・核
SHEPPS、津野洋太郎『4111東京大学文京区新宿1-1-1 東京大学地震研究所』
／田中昌弘（地理院）
「地震の構造を地磁気異常から、地磁気とマントルを誘導電磁場から、核の流体運動イナートモロを主構造の形態を変数に変数（現在のものなら固地質時空中まで）から探す」
(キ) 地震予知・火山予知
（地震、SHEPPS、火山、地球化学）
岡田弘『4020兵庫県立豊岡市立詰田59北海道大学理学部4047神前町』
／岩田明彦（東京大学）
「予知研究の着実な成果を積み重ねてきた。しかし社会の要求に答えるためには、地球科学者間の緊急の研究の推進は不可欠である。予知研究の現状と将来を説明したい」
(ク) 火山活動
（地震、SHEPPS、火山、地球化学）
寺本博之『3901兵庫県立豊岡市立詰田59東北大学理学部地震予知・火山予知センター』
／渡辺秀夫（東京大学）
「伊豆半島周辺をはじめとする近隣の火山活動、及び、火災活動に関する問題全般についての観測、研究、理論など、多様なアプローチによる講演を歓迎する」
シンポジウム：「地球集中機」
（地震、SHEPPS、火山、地球化学）
深尾良夫『464-01名古屋市千種区名古屋大学理学部地球科学教室』
／今村義信（築工大物理）
「マントルの下部を含む構造、超流動実験、核流体運動とダイナモ、核形成過程、D°層の形態と不安定性等、核とその境界の諸問題を総合的に追求する講演を歓迎する」
★地球磁気・地球惑星面学（SHEPPS）講演会の固定セッショ
ンについて
講演申込・予稿原稿送り先及び申し込み要領
☆地球内部および月・固体惑星面
〒606 京都府京都市左京区西山東山町
京都大学理学部地球科学教室
島根雅之
☆太陽・惑星間空間および地球・惑星面面
〒606 京都府京都市左京区西山東山町
京都大学理学部地球科学教室
寺沢敏雄
☆地球・惑星大気面
〒442 埼玉県入間市3-13
名古屋大学原子力研究所
近藤 芳
1. 締切は2月1日（木）必着です。締切日以降に到着した申
込は自動的に却下いたします。電話やFAXによる申込や遅延依
頼は受け付けません。
2. 講演申込用紙への記入（氏名・所属・講演題目など）は、プ
ログラム編集・印刷の都合上必ず日本語でお願いいたします。な
お外国人の氏名はアルファベット表記でもかしこまられています
が、所属はできるだけ日本語で表示して下さい。
3. 非会員のみによる講演申込は受け付けません。筆頭著者（フ
ェーストーサー）になれるのは1人1講演に限ります。なお同
じ内容の講演を、筆頭著者だけを除き複数の講演として申
込みはおやめ下さい。
4. 予稿原稿は、封筒用紙にワープロで印刷されるか、あるいは、黒色のインク、ボールペンなどで丁寧に手書きして下さい。ワープロで封筒用紙に直接印刷するのが困難なときは、無理に張り
付けたりせず、規定の枠内にあうようにB4用紙に鮮明にコピ
ーとしてお送りしても結構です。
5. 予稿原稿が日本語の場合は、枠に規定されているように2段
組にされ、印刷後読みやすくなります。
6. プログラム編集を迅速に行うために、予稿原稿のコピーを
必ず1冊添付して送付下さい。
7. 口頭発表の時間は15分（講演12分、質疑3分）以内で
限られた時間内に発表を終了するために、ポスターセッション
に特別に分類を定めずに50件の発表を予定しておりますので、
これをお守り下さい。ポスターセッション・口頭発表の区分はご希望に
できるだけ従いますが、プログラム構成の関係上ご希望の区分以
外での発表をお願いすることもありますので、ご協力下さるよう
お願いいたします。
9. ポスターの掲示板は、縦180cm、横90cmのベニヤ板
1枚です。画像・図表類はポスターセッション・会場に用意いたします。
10. 緊急の問題のため、約5件のポスターセッションを確実に
いたします。発表希望者は4月5日までに関係のプログラム委員に申
込み込んで下さい。
11. 各セッションの発表を2名とし、講演の進行を効率的に進
めていきたいと思いますので、ご協力お願いいたします。

VI 1990年WPGP（8月21～25日）について
AGU側からSpilhaus氏が来日し、9月12日に金沢で実行
委員会（LOC）、14日には東京で組織委員会（OC）が開
かれた。これらの会議で1990WPGPの最終実行計画が以
下のように決定された。
(1) 登録料
1990年7月21日まで：￥14,000
それ以降：￥17,000
ただし、学生は半額
(2) アドバストラクト
締切：　1990年2月14日
送付先：　直接AGUへ
フォーマット：EOS（June 27, August 22, 1989）参照
注: Abstract chargeが必要
(3) 論文数制限
基本的には制限しない方向で検討しているが、論文数が非常
に多く会場の運営が困るのことで、プログラム委員会（PC）
の判断に委ねることとしている。複数の論文を提出する著者は、制
限の場合は想定して、論文に優先順位をつけたことが望ましい。
（4）アブストラクト集
通常のAGM-Meeting 同様、EOS にまとめられるが、WP 番組中どこ手に入れた場合、$15 または $22,500 支払
えば航空便で各自に郵送してもよい。また、当日 $6 ま
たは$1,000 で会場でも購入できる。
（5）特別セッション等 現在 PC で検討している。
（6）その他
国内外では WPGM を国際地球物理情報会議と呼ぶことになった。
詳しくは、東工大の本部運営委員にお問い合わせ下さい。

VII JGG 出版財政報告
学会誌発行に係る財政問題が顕在化して久しい現在、具体的な
打開策を提示するには時期によりましたと深刻に受け止めています。
問題の所在は編集委員長報告に詳しく述べられていますので
学会会員各位におかれても十分ご理解のうえ、運営委員
までご意見をお寄せ下さい。

VII JGG 編集委員会報告 編集委員長 小口 高

非会員向けの教科書を出版することとありますが、JGG が月刊
として定着するに伴い、毎月の発行日を初めにすることが可
能となってきました。今後、更に一層 JGG 発行を増やすために、
会員の皆様の積極的な投稿をお願いいたします。

しかし、次第に顕著になってきているのは表のもの。我々は
まだいくつかの問題を抱えています。一つは論文投稿数の変
動の大きさです。これは、後に述べる、JGG 発行にかかわる
費用の問題にも直結しています。

JGG がその発行費の一部を文部省の助成金によってまかなっ
ていますが、助成金は年間の発行費によって決定されます。実際の発
行頁数を制限込むのは助成金の数値から見ても避けられない
が、年毎に掲載数が大きく、低い方では合わせて適
度を設けようれない訳です。従って、掲載数が多い方に偏ったとし
て赤字を生することになります。

この問題の解決は、逆説的にありますが、投稿論文が増加すれ
ば当面の目途を立てることが可能になります。つまり、編集委員会での
手数料の数が増えた場合に論文数を増加するようなことが出来
るようなれば超載のないながら、助成金などに従事的に対応
することが可能になるからです。

更に大きな問題は、現行の会費の枠の中で考える限り、会員の
に伴って発行部数が増加すると赤字が増えると云って、構造的
的な問題です。この点を本質的に解決しようとすれば、会費の上
げが必要となりますので、問題の解決を現在運営委員会で検討し
て頂いている所です。これは、新しく始まった問題ではなく、従
来と異っていったのが会員数の増加によって顕著化して来たも
のです。会員の皆様のご配慮をお願い申し上げます。

次の段落は JGG 論文奨励費に関するものです。編集委員会は
昭和 25 年に開始されていますが、そのかわりの時間をこの賞の発足のた
めに、その性格、編集論文選考の手続き、及び今年度の審査に要
やしました。賞の性格としては、手取くさまった、しかもおも
しょくない論文より、荒揃いではあっても、大胆でおもろい革
命的な性格をより高く評価すると言う点で編集委員会全員の意見
の一一致を見ました。

就職論文選考手続きは以下の通りです。先ず、金屬編集委員がそ
れぞれ数年間の論文を中心として、何編かを推薦します。これらの全ての推薦論文のリストを作成して編集委員に
配布し、金屬編集委員が推薦された論文のすべてに目を通されます。
この予め的作業の後、編集会を開き、検討を始めますがもちろん、必要に応じて論文の読み直し行為を行います。こうして最終的に選
考された論文は候補論文として評価員会に諮られ、審査の後、受
賞論文に決定します。今後、具体的な問題に対して、これらの
手続きの細部には若干の変更があるかもしれませんが、基本的には
今 plag た方法に大きな問題はなく、継続して実施して行くつもりで
す。

この賞は若手研究者の奨励のためのもので、年齢が40才以下
に限られています。さらに、投稿者になりますが、論文の品質、
大胆さ、革命性などがより評価されます。研究者は本会、これ
らの要素が十分に大きいと考えられます。

研究を行った結果、既に発表されている論文の質の増加の結果とおなる成果が得られました。”とい
う研究はやはり変わらぬことがあらすことになると思うのです。どうし
て会員の皆様には年々にかかわらず、革命的論文を多数投稿して下
さいますようお願い申し上げます。

IX 新入会員
154 回運営委員会で承認された14名（前会員含め）及び、155 回運
営委員会で承認された6名の新入会員が学会総会にて商談された。
155 回運営委員会において以下の方々の入会が認められました。

正会員 塩内千尋 京都工芸繊維大学工学部
小布生 神戸大学総合情報処理センター
東京大学理学部物理学科
村上英記 高等大学理学部地理学教室
学生会員 小田保邦 京都大学理学部地球科学教室
（正四、学生二、計六名）

この期間（1988年7月～10月）に退会された方は正会員1名、学生
会員2名、種別変更1名、外国会員から国内会員への変更1名です。

正会員 学生会員 名誉会員 賛助会員 海外会員
521 71 6 19（34口） 52

X 次期・次次期学会開催予定
次期学会総研会及び総会の開催は、当会報の V に詳しく報告さ
れている通り、東京工業大学の助会により、平成 2 年4月に
8 日に地球惑星科学総研会学会合同大会として開催される。尚、合同
大会となるため、予想時間が割りと早くになったこと、従来通り
のセッションと共同セッションがあり予想の記録法、送付先が異
なりますのでVを踏まえた上での違いのないようお願い致します。

次期、秋の学会及び総会は東京地理学会地理物理研究の平成
世会により東京地区にて開催されることになった。時期は、WP
G（当会報）V から間を設けて 11 月に予定。
磁気圏帯に関するチャプマン会議

Chapman Conference on Magnetospheric Substorms

開催主旨：去る2月待望の極地磁気圏観測衛星【あけぼの】が成功的に打ち上げられ、順調にデータを取得しつつあることは、磁気圏・電離圏研究家にとって新事に喜ばしいことです。

【あけぼの】衛星の観測は、わが国の磁気圏・電離圏の研究に新しいインパクトを与えるとともに、国際的にも果たし期待されております。このような状況を考え、磁気圏研究に関する国際的な会議を開催することを提案し、まことに意義ある考え、この会議の開催を計画しました。参加の皆様の皆様のサポートを得て、Chapman Conference on Magnetospheric Substormsとして開催することになりました。日本でもこのような研究集会を設けることが、これからの研究を推進し、研究者への刺激となることを期待しております。Chapman Conference としては、昨年東北大学の大谷教授のご努力で開催されており、開催の場として、科学の交流が実際に行われる会場とされているのです。

開催日時：1980年9月3日〜9月7日（5日間）
開催場所：神奈川県藤沢市太平洋ホテル
開催責任者：
国分征（東京大学 理学部）
飯島健（東京大学 理学部）
Thomas A. Potemra（ジョージタウン大学応用物理研究所）
Joseph R. Kan（アラスカ大学）

後援：地球磁気・地球惑星学会、American Geophysical Union

プログラム委員：
大谷康（東北大学理学部）
平澤康男（国立極地研究所）
上出洋介（京都大学）
杉浦正久（東京大学開発技術研究所）
細田浩一郎（宇宙科学研究所）
R.C.Blich (NASA国立研究所)
L.A.Frank (アラスカ大学)
G.L.Sinclair (ヒルフト大学ロッテルダム分校)
D.Baker (NASA/GSFC)
D.J.McEwen (ノースカロライナ大学)
E.Frisis-Christensen (デンマーク気象研究所)
R.N.Lundin (スウェーデン宇宙物理研究所)

プログラム概要：
1. 原始的レビュー
2. 磁気圏帯と磁気圏域境界面／境界層（半日）
3. 磁気圏帯と磁気圏尾部（半日）
4. 磁気圏帯と内部磁気圏（1日）
5. 磁気圏断面とオーロラダイナミックス（1日）
6. 磁気圏製モデルと総合論考（3日）

【参加者、参加料、期限、運輸先
Abstract送付〆切 1990年3月31日
参加者送付〆切 113 東京駅 - 北京東京 7-3-1
東京大学理学部地球物理研究所 関本征/飯島健
Tel 03-815-8020 FAX 03-818-0745
参加登録申込(Registration Fee) 25,000円（学生は12,000円）
Abstractの形式、参加申込については、いずれ関係各所にお知らせいたします。
今道 周一 名誉会員

今道周一名誉会員は平成元年8月5日午前10時2分頃、
炎のため逝去された。享年95才。

同氏は大正10年東京物理学校を卒業され、中央気象台で
地磁気観測に従事、大正12年渋沢地磁気観測所長に就任し、
関東大震災で被災した地磁気観測所の再建・整備を進められ
た。とりわけ、標準地磁気観測所として地磁気観測標準器
の整備開発に心血を注ぎ、日本の地磁気観測の基盤作りに努
められた。この間、アメリカ・カーネギー研究所の磁気儀、
また国際セントラルQHMと呼ばれる標準磁気儀との国際比較観
測を行い、観測精度の向上に努められました。特に昭和2
5年から27年間にわたり、国内各機関の協力を求めて、標準
磁気儀の開発に邁進され、当時の国際的超一流の磁気儀を完
成するという大きな業績を残されました。

昭和27年退官されるまで、国内外の観測、地磁気観測
所の開設など地磁気観測の発展に大きな貢献をされました。

昭和24年に地球磁場の複雑に関する研究により京都大
理学博士の学位を授与され、また数々の研究のうち大気面
爆発現象に伴う地磁気擾乱に関する研究（昭和15年）およ
び日本における角の恒年変化に関する研究（昭和31年）
は大きな業績であります。また著書として、昭和14年に出
版された地球電磁気学（岩波書店）その他があります。

昭和22年日本地球電磁気学会創設の際に評議員を務め
られ、昭和23年の第3回学会を東京に於て開催されました。
また昭和36年の現体制に移る時の評議員も務められ、本学
会の基礎作りに貢献されました。

退官後は昭和29年より東京理科大学に勤められ、同3
8年理学部長、退職のあと同49年まで学生の育成に努めら
れた。昭和51年同大名誉教授に授与されました。

日本の地球電磁気観測の発展に対する功績により本年5
月第85回学会総会に於て名誉会員の推挙されました。
同氏の数々の功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。
人間の科学特別委員会設置される

平成元年8月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議会は、去る4月に開催した第107回総会において、人間の科学特別委員会を追加設置しました。今後、日本学術会議に加えて、この特別委員会に加えて、最近発表された「委員会報告」等について、お知らせいたします。

人間の科学特別委員会の設置

本会議は、第107回総会において、人間の科学特別委員会を追加設置しました。この特別委員会は、人間の科学と工学の分野に係る問題を検討するため、設置されました。今後、特別委員会は、学術・産業界・政府等との協力の下、人間の科学と工学の分野に係る問題を検討し、一層の発展を図る予定です。

「委員会報告」2件を発表

このたび、本会議の「生命科学と生命工学特別委員会」と「化学研究連絡委員会」は、それぞれ、当センターの重要課題に関する審議結果を発表しました。今後、これらの審議結果は、学術及び社会に反映されるものと期待されています。

ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進

日本学術会議会は、ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進に向けた取り組みを明らかにしました。このプロジェクトは、ヒトのゲノム解析を通じて、健康・医療の分野での進歩を図ることを目的としており、今後も一層の進展を期待されています。

大学等における化学の研究環境の整備について

化学研究連絡委員会は、大学等における化学の研究環境の整備についての検討を行った。この結果、大学等における化学の研究環境の整備が期待され、今後も一層の改善が期待されるものとされています。

-8-
平成2年度共同主催国際会議

本会議は、昭和28年8月18日付で決定された件の学術関係国際会議に関係学術研究団体と共同主催してきたが、平成2年度には、件件を挙げ、次の6会議を開催することが、6月20日付の議案で承認された。（カクコ内は、各国会議の開催期間と開催地）。

第1回国際土壤科学懇談会
（平成2年8月12日～18日、京都府）
共催団体：（社）日本土壤肥料学会

第2回国際応用心理学懇談会
（平成2年7月22日～27日、東京都）
共催団体：日本心理学会

第15回国際生物学会懇談会
（平成2年9月13日～22日、大阪府）
共催団体：日本微生物学会

第11回国際数学連合総会及び第21回国際数学者懇談会
（平成2年8月18日～29日、神戸市）
共催団体：（社）日本数学会各地会

第11回国際数学懇談会
（平成2年9月2日～8日、京都府）
共催団体：日本数学会懇談会

第5回国際生物科学懇談会
（平成2年8月23日～30日、横浜市）
共催団体：日本生態学会

国際社会科学研究連盟（IFSSO）第9回大会個
総会の日本開催

国際社会科学研究連盟（IFSSO）の第9回大会及び総会が、本年10月2日から7日（口）、東京六本木の国際文化会議とは日本学術協議会で開催される。

国際社会科学研究連盟（International Federation of Social Science Organizations、略称IFSSO）は、世界の社会科学の発展に貢献することを目的とする、世界各国の学術院や学術会議で構成されている、社会科学分野を代表する国際学术団体である。例、35か国の国家会員等で構成されており、我が国、国際学術連合が、我が国を代表して加わっている。また、現在、日本からは本学会の藤井隆第3部会長がIFSSOの事務総長を務めている。

なお、IFSSOは、社会科学分野の国際学术団体の連合体（総合機関）である国際社会科学研究連盟（International Social Science Council、略称ISSC）に加盟しており、ISSCの中では、国及び地域を代表する機関という位置付けをしている。

今回の会議には、IFSSOに加入している各国の学術院や学術会議の代表、並びに関係する国際学术団体の代表など、50を超える国から約300名（うち、外国人は約150名）の学術者が参加する。

この会議では、メインテーマ「考古学の世界の学術政策」との下に、「研究、訓練体制の改革」、「既存領域を超える新分野」、「社会科学・科学的知識の形成」及び「国際協力のアカデミック・インフラストラクチャー」の4つのサブテーマが設けられ、多分野から世界の学術政策の変化が論じられる。

また、この会議では、特に、3つの日本セッションが設けられ、「急激な学術技術の進歩」について、①人間に与えるインパクト、②法律や制度に与えるインパクト、③社会経済システムに与えるインパクト、という3つの視点から